
木から生まれる世界

来々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

木から生まれる世界

【Nコード】

N6985A

【作者名】

来々

【あらすじ】

その世界には、木が一本有るだけだった。その木は自分の名前を知らず、一人ぼっちだった。そんな木の命の話。

いつからこの場所にいたのか、それは私にも分からなかった。何故この場所にいるかも分からなかった。

それでも、私はこの場所に立っていた。私は神を信じている。だから、私がこの場所に立っている事にも意味が有ると思っていた。

私は名前を持っていなかった。誰も私に名前を付けてはくれなかった。しかし、私にとつてその事は、気にする事の無い些細な事だった。何故なら、この場所には私以外に誰もいなかった。誰もいないから、私に名前を付けてくれる人はいなかった。

この場所に立ち始めてから、いくつもの刻がたった。

晴れた日の太陽は、私に明るい光をくれた。晴れた日の月と星は、私に広い心をくれた。雨の日は自分の足下にできた水溜まりを見て楽しんだ。でも、一番楽しみだったのは、雨の次の日の朝に、自分の体についた露の美しさを見る事だった。毎日の陽射し、月光、暖かさ、冷たさそして天気が私の友達だった。

この場所に立っている事が、私の当たり前になってきた。この場所に立っていると、私は色々な事が理解できるようになった。自分の体が成長していると実感できた。私の体は、少しずつ太陽と月と星がいる所へと、近づいていった。

太陽は、近づいて行く私を見て、元氣な光を注いでくれた。
月は、近づいて行く私を見て、優しい光をくれた。
星達は、近づいて行く私を見て、心の安らぎをくれた。

ある日、前よりも近い所にある太陽が、私に話しかけてきた。

「その貴方、貴方の御名前は何とおっしゃるのですか。」

この日、初めて太陽が話せると知った。

私は太陽に向かって言った。

「私に名前はございません。何故なら、この場所には私以外誰もいないからです。太陽様、話せるのでしたら私に名前を下さいませんか。」

すると太陽はこう言った。

「私に名前など付けられません。私の役目は、この場所に光を注いで、生き物を育てる事ですから。貴方は、私が産んだ生き物の、ひとつ目なのですよ。」

私はこう返した。

「知っています。だからこそ私は、父である貴方に名前を頂きたいのです。」

すると太陽は、

「私を父と呼んでくれるのですか。有難う。ですが、やはり私には無理です。貴方に名前を付けるのは、後に生まれる新たな命達でしょうから。」

私は、

「わかりました。」

と返し、会話を止めた。

それからしばらく、私はずっと一人だった。太陽は、もう私に話しかけてはくれなくなった。私は、今だ名前を持っていなかった。しかし、太陽が言った、

「この場所に新たに生まれる命」
を信じて待つ事にした。

どれくらいの時間がたっただろうか。そんな事も感じ初めたある日の事……。

自分の体に、小さな緑の物体があった。私は驚いた。この物体がもし生命なら、これこそが私に名前を付けてくれる存在だからだ。私は物体が生きているかどうか確かめるため、声をかけた。

「もし、その貴方、貴方のお名前は何と言うのですか。」
すると、その物体から若い声がした。

「ごめんなさい。僕は生まれたばかりで、名前を持っていないのです。よろしければ、僕に名前を下さいませんか。」

私は戸惑いながらも、こう答えた。
「すまない。実は私も、貴方が生まれるまでずっと一人だったから、名前を持っていないんだ。名前を持たないヤツが、新たな命に名前を付けてあげる訳にはいかない。」
すると、彼も驚いてこう言った。

「あなた様も名前が無いのですか。でしたら僕と一緒にですね。」

「一緒」

この言葉を聞いて、私は理解した。もう自分は一人では無い事。
「何なら、僕達で名前を付け合うのはどうでしょうか。」

「ああ、それもいいかもしれないな。」

それから、私達は一人では無かった。今では彼のような緑が、私の体に沢山生い茂った。彼らは季節によって色を変え、私を楽しませてくれた。

彼自身は、風に流されて私の体からいなくなった。しかし、彼の友達たちが毎日私を笑わせてくれた。だから寂しくは無かった。

最後に、二人で付け合った名前を教えよう。

私は【木】

彼は【葉】

私達の名は、今も沢山の兄弟に受け継がれている。

（後書き）

初めての完結作品です。文章力も無いくせに、こんな事ばかりが頭に浮かびます。これからも頑張りますので、よろしくお願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6985a/>

木から生まれる世界

2010年10月11日18時52分発行